みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

人類学とキリスト教

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉本, 良男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4576

人類学とキリスト教

200キロ以上の道のりをキリスト教の聖地に向かって歩く巡礼（インド、タミルナードゥ州、2007年）。

杉本良男 文・写真
すぎもと よしお
民族社会研究部教授
専門は社会人類学・南アジア研究
著書に『インド映画への招待状』（青弓社 2002年）、編著に『アジア読本 スリランカ』（河出書房新社 1998年）、『宗教と文明化（二〇世紀における諸民族文化の伝統と変容７）』（ドメス出版 2002年）、『キリスト教と文明化の人類学的研究（国立民族学博物館調査報告62）』（国立民族学博物館 2006年）など

人類学（者）とキリスト教（ミッション）とは本来親和的な存在であるが、理論上は対立してきた歴史がある。もともと、19世紀初頭の人類学の先駆者は、奴隷解放運動を通じて、イギリスの福音主義的な人道主義者として出現している。その後イギリスの帝国主義が拡大するとともに、現地主義的な植民地行政もミッション活動も傍流となり、積極的に文明化を推進する方向にかじを切った。インドにおいてはこれは、現地語を重視するオリエンタリズムから英語主導のアングリシズムへの転換としてあらわれた。一方、現地主義の人類学者は植民地行政からはずれ、その後現在まで一貫して敗北したミッションとしてふるまうことになった。

1970～80年代にとくにキリスト教世界の人類学者のあいだでミッションと人類学者との関係が話題になったことがある。要は、人類学者がはじめて現地にはいるときにはあれだけミッションのお世話になっておきながら、調査報告では伝統文化の破壊者としてきびしく批判している、これは道義上許されるのか、というような趣旨であった。とはいえ、日本人の人類学者も信者であるなしを問わず、はじめにミッションを通じて現地にはいる場合が決して少なくない。その後この人類学とミッションの問題は若干の進展をみたが、そのうちフィールドワーク論争やポストコロニアル論争などにかき消された感がある。

人類学は西欧世界で成立した学問であるだけに、その存立そのものにキリスト教的バイアスがかかっていることはいうまでもないが、それがとりわけ意識されたことは少なかったように思う。また、人類学者が熱心に記述した伝統社会・文化をになう人びとがほとんどキリスト教徒であったとしても、そのことに正面から取りくむ研究者はまれである。人類学にとってキリスト教はつねに考慮の外にお

キリスト教の聖地に詣る足の不自由な人（インド、タミルナードゥ州、2009年）。

キリスト教の聖地に頭髪を奉納する（インド、タミルナードゥ州、2009年）。

かれてきたのである。

フィールドワーク論争やポストコロニアルの議論などは、本来世界の構造の不均衡に由来する「書く人」と「書かれる人」とのあいだの権力関係にのみ関心を集中して、不均衡の構造そのものを問題にすることはない。レヴィ＝ストロースがひらいた西欧近代批判の視座は失われ、不均衡の構造は手つかずのまま、研究者がいかにうまく立ち回るのかに議論が集中している。

人類学的キリスト教文明研究を構想するさいには、こうした世界の構造の不均衡そのものを問う問題意識と、もうひとつ人類学的比較研究の可能性を探る意図も重要なポイントであった。それは一言でいえば、キリスト教が人類史上最大の普遍主義をうみだしているという単純な歴史観にもとづいている。とくにキリスト教ミッションは、現地社会・文化を破壊する悪辣非道の存在と誹謗中傷されてきたが、しかし逆にいえば、およそ人類学者の行くところミッションの入っていない地域はほとんどない。人跡未踏の地、秘境は人類学者の思い入れほどどこにでも存在しているわけではない。

それだけではなく、人類学が伝統的に研究対象としてきた社会は、むしろ世界の最先端の事象に直接さらされているのが現状である。研究者が人跡未踏の最奥地で遭遇する伝統社会なるものは、むしろ現代世界の構造をさぐる重要な手掛かりを提供している。「伝統」の幻想に酔いしれたい人類学者はそこで眼を閉じてしまい、かつての文明批判の重要な契機を見失ってしまっている。

異教の地に生まれた人類学者が、キリスト教ミッションなりキリスト教そのものなりを対象化しようとする試みは、もっとあってしかるべきであろう。ただ、旧植民地の人類学者はそうじてエリートであり、キリスト教徒の割合も多いであろう。また、直接の改宗者ではなくとも、たとえば日本でいえば、東大の矢内原イズムの信奉者が、それを代行している場合もあるだろう。その意味で、日本においてでさえ、キリスト教批判には一定の限界があるのはいなめない。

こうした風潮のなかで、人類学においてキリスト教なりミッションなりへの関心は、まずは改宗それにキリスト教の現地化の問題に集中する。その代表的な研究はファン・デル・フェールによる『近代への改宗(*Conversion to Modernities*)』である。ここには圧倒的な普遍化、近代化、文明化の原理としてキリスト教が位置づけられ、現地社会がそれにどのように対応したか、が問題の核心となる。ようするにこのような改宗論は、キリスト教ミッションのイデオロギーそのものにもみえる。

そうであるならば、人類学的なキリスト教ミッション研究の可能性はどこにあるのであろうか。それは、普遍主義、文明としてのキリスト教という多分に抽象的な側面と、現地社会で遭遇する具体的な存在形態としてのキリスト教を、連続と不連続の相としてとらえ直すことである。すなわち、人類学的な現地主義を第一にして、普遍主義との不断の往還をくりかえす必要があるということである。そのために、まずは人類学者が通暁する現地社会におけるキリスト教ミッションの存在形態について、具体的な記述をおこなうことからはじめなければならない。

そのさい注意すべきは、あくまでも、主体は現地社会・文化であり、キリスト教が主語ではないことである。じっさい、キリスト教への改宗が、ミッションが夢想するような、キリスト教への理解から実現している場合はむしろ少ないであろう。われわれが現地社会に見るのは、たとえば物欲・金銭欲、健康祈願など、本来のキリスト教がめざした目的とは異なった理由での改宗だけでなく、むしろ、さまざまなセクター間の対立状況を背景にした、差異化のための改宗である。そのため、キリスト教の存在を、まずは他の宗教、さらにはさまざまな組織化原理との関係性において検討することのほうが重要である。

この特集では、民博の共同研究「キリスト教文明とナショナリズム――人類学的研究」（2007-2010）でこれまでに発表していただいたおもに若手の研究者による、新しいキリスト教・ミッション研究の可能性を示唆するような論考を集めている。地域もラテン・アメリカ、ヨーロッパをふくめて世界にまたがり、さらにはキリスト教文明化の進度を反映して、時代的にも大航海時代以後現在までと多岐にわたっている。

こうした、現地社会文化に足場をおいた複眼的な視点は、世界を分断された単一の原理によって分析・理解しようとする諸学問に対して、単一の社会に基点をおいて宗教・経済・政治などさまざまな側面を総合的に理解しようとする人類学に特権的な主題である。そのさいの重要な方法論として、人類学において最近とみに評価を下げた「比較」の視点が不可欠である。それも、比較研究の泰斗マックス・ミュラーなどの伝統をひく本質主義的な比較ではなく、たとえばルイ・デュモンなどの相互の差異を明確にする異化作用としての比較である。そのことによって、擁護する側も、批判する側も、本質主義の土俵の上でおこなっている比較をめぐる議論を、人類学的な批判理論の方向にむけることが可能だと考えている。

マリア像をのせた山車（インド、タミルナードゥ州、1999年）。